

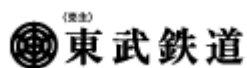


《 リボンシティ レジデンス 》  
アート・コンペティション

# 事業報告書

主催  
COCOクラブ川口

企画協力  
KAWAGUCHI ART FACTORY



## Ribbon City Concept

人を、暮らしを、リボンでやさしく結ぶ、

光と水と豊かな緑のライフ・エンターテイメント・シティをめざして。



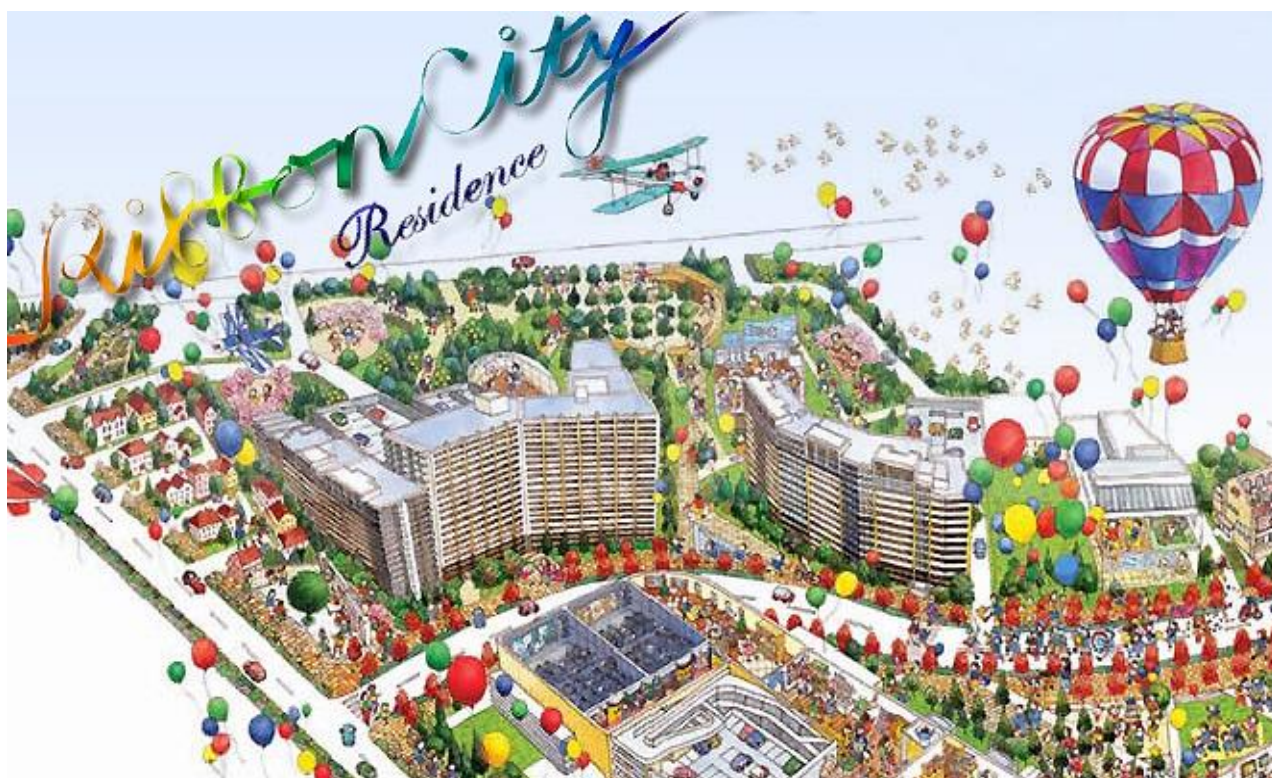
「リボンシティ」キャラクター  
リボンちゃん

© SAPPORO BEVERAGE Co.,Ltd.

## － はじめに －

平成14年9月、サッポロビール株式会社は埼玉県川口市の自社埼玉工場の閉鎖を発表、その跡地開発のコーディネートを都市基盤整備公団（現UR都市機構）に委託した。川口市を交えた各認定事業者（株式会社イトーヨーカ堂・株式会社サッポロスポーツプラザ・東武鉄道株式会社・株式会社コスモスイニシア（旧株式会社リクルートコスモス））は、川口都心部における希少な大規模敷地である当地区の土地利用転換に際し、川口駅周辺地区と連携し、都心部の活性化に資する商業・住宅・文化等の機能を導入することにより、多様な都市機能を持ったにぎわいや楽しさ、うるおいのあるまちづくりを進め、川口における都市再生に向けた新たな拠点整備を行うことを目的として事業を行なう事となった。中でもその中核となる大規模分譲集合住宅施設は、868世帯・約2500人が暮らす新しい街「リボンシティ レジデンス」として生まれ変わる事となり、その開発に当たっては急激な街の変貌が新旧地域の隔絶を生むことなく、より自然な調和を目指す上から、新住民へのコミュニティ形成支援を軸として川口の街に新たなコミュニティ&ネットワークを誕生させるべく「COCOクラブ川口」を設立することとなった。具体的には新住民が入居時よりストレスなくスムーズに暮らせるよう様々な要望に応える「マッチングシステム」を導入するもので、これは同時にアドバイスやサポートを行なう旧住民とのコミュニケーションにつながるものである。そして、その活動の一環として新たな街の再生（RE・BORN）を記念すると共に、新しい川口からその思いを世界へ向けて発信すべく、若いアーティストから作品を公募し、「リボンシティ レジデンス」の敷地内に恒久的に設置・展示する《リボンシティ レジデンス》アート・コンペティション事業を開催する事となった。

以下、背景となる川口の成り立ちや美術の動向を踏まえてその内容を報告する。



－ 川口市とビール工場について －

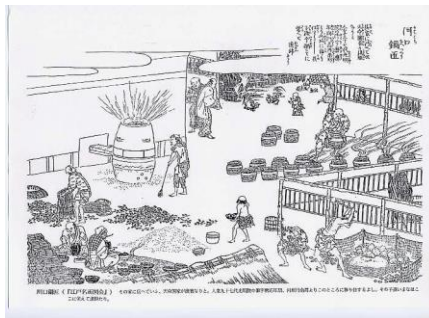
川口市は埼玉県の南端に位置し人口50万人(平成18年11月現在)を擁する県内第二の都市である。「川口」の地名は荒川(旧入間川)の河口に臨んでいた事に由来すると言われ、室町時代の書「義経記」の中に「小川口」の記述があり、治承4年(1180年)源頼朝の拳兵に加わるため弟義経が鎌倉に向かう途中、川口の渡しで兵を改めたと記されており、川口の名を伝える最古のものとなっている。



【写真右→】  
荒川堤外の本町一丁目にある  
義経記の一文を記した鎌倉橋の碑。



【←写真左】  
歌川広重作「名所江戸百景」より、「川口の渡し善光寺」



【←写真左】  
江戸時代の鋳物工場の様子。中央左寄りの  
コシキ炉で鉄を溶解している。

古くから鋳物の街として栄え、その起源は室町時代に遡ると言われている。江戸時代には鍋・釜・鉄瓶といった日用品鋳物の産地として隣接の大消費地江戸に供給、その後、明治時代には技術革新を経て近代産業の一端を担う機械部品鋳物生産に転換を果たし、太平洋戦争後は高度経済成長の波に乗り京浜工業地帯の一翼として昭和30年代後半には600軒以上の鋳物工場が操業し隆盛を極めた。

鋳物業は、映画「キューポラのある街」に象徴される川口の大きな顔となったが、オイルショック以後急速に業績は悪化し生産は下降を辿り、過酷な労働条件に伴う人員確保の困難や生産効率の低下もあり、更には東京のベッドタウン化によって公害問題も顕在化し、移転や廃業による比較的大きな跡地は高層住宅等へと変わって行き、かつての生産の場は生活の場へと変貌を遂げようとしている。

【写真右→】  
昭和30年代の  
川口駅付近。  
鋳物工場の煙で  
霞んで見える。



【←写真左】  
溶けた鉄(湯)を型に流し込む作業の様子。

現在の川口は鋳物や機械産業、植木、釣竿、機織などの伝統ある“ものづくり”の気風を残しつつ、首都東京と隣接する利便性を活かしながら「緑 うるおい 人 生き生き 新産業文化都市 川口」を標榜しその歩みを進めている。

川口の代表産業たる鋳物業と共に、サッポロビール工場もまた川口の発展を共に支えて来た重要な存在であった。件の映画のラストシーンにもその姿は借景として登場したし、鋳物工場から出る鉄の焦げる匂いとは別に、ホップを炊く独特の香りは市民には馴染みのものであった。

サッポロビール埼玉工場は、大正 12 年（1923 年）当時の横曽根村字並木に日本麦酒鋳泉株式会社東京工場として建設された。開始当初は清涼飲料水の「三ツ矢サイダー」、「三ツ矢レモネ」の製造を主生産として、翌年 6 月より稼動を始めた。ついで「ユニオンビール」、「カプトビール」の商標による壘詰ビールの生産を大正 14 年 5 月に開始、このときをもって創業年月とする。昭和 8 年（1933 年）11 月、大日本麦酒株式会社と合併、同社川口工場となる。同年 12 月、ビールと併せ「リボンシトロン」、「ナポリン」等の製造を開始し、昭和 10 年 7 月から「エビスビール」、「サッポロビール」の製造も始めた。



【↑写真上】建設中の日本麦酒鋳泉(株)東京工場（大正）



【↑写真上】大日本麦酒(株)川口工場（昭和）

昭和 20 年の終戦に伴う GHQ（占領軍総司令部）の指令による過度経済集中排除法、いわゆる財閥解体により大日本麦酒株式会社は解散され、日本麦酒・朝日麦酒株式会社に二分割され、川口工場は日本麦酒株式会社川口工場となる。24 年 9 月より「ニッポンビール」の商標でビールの生産を開始、同 27 年 2 月より国産としては初の「オレンジジュース」の製造もはじめた。同 39 年に社名変更により、サッポロビール株式会社川口工場となる。同 48 年 3 月からは缶ビールの生産をはじめ、同 62 年 4 月よりサッポロビール株式会社埼玉工場となる。平成 8 年 1 月時点での工場規模・工場敷地面積約 1 万 4 千㎡、建物延床面積約 8 万 7 千㎡、主な生産品は樽生ビール。生産量は年間大瓶換算約 3 億本、1 日生産量大瓶換算 160 万本であった。平成 6 年 10 月からはミニブルワリーとして「地ビール」の生産をはじめた。

【写真右下↓→】

閉鎖前のサッポロビール工場。



【↑正面入口付近】



【↑工場全景】

そして、同 14 年会社発表により、主に関東地域の生産を千葉工場と静岡工場に集中するとして、平成 15 年最盛期をもって埼玉工場のビール・発泡酒製造を停止、平成 16 年にすべての工場施設は解体され、約 80 年間に渡り川口のひとつのシンボルであった「ビール工場」はその歴史の幕を閉じた。

## — 川口における美術の動向 —

古くから川口は産業都市として発展を遂げて来た事は前述の通りだが、美術を含む文化についての総括的資料は認められず、僅かに市史等の中に散見されるのみである。戦前までの近代については、「俳句」「放送」「文化財」「芸能・娯楽・その他」という区分けでの記録があり、「芸能・娯楽・その他」の中に、昭和 17 年「川口産業人文化展」の開催が記録されている。日本画・洋画・ポスター・時局漫画・版画・写真・手芸品等が出品種目とあり、県下初の産業人美術展であったが、戦時体制による士気高揚が主目的であった。戦後は昭和 22 年に川口美術家クラブが発足、翌 23 年には戦前に芸能娯楽団体を統合した「川口文化連盟」が「川口市文化団体連合会」として改組結成され、その中で「川口市文化祭」の一部門として美術展を毎年開催していたが、昭和 46 年より分離し川口市主催の「川口市総合美術展」開催を契機に「川口市美術家協会」が結成された。昭和 49 年よりは川口市・川口市教育委員会・川口市美術家協会の三者主催となり一般公募により毎年開催され、川口総合文化センター「リリア」竣工後は、同館展示ホール・催し広場にて開かれている。平成 2 年に開館した「リリア」には隣接して 3,1 ヘクタールの広大な「リリアパーク」



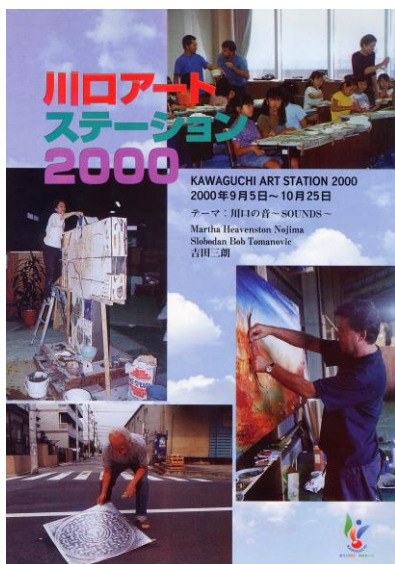
を併設、舟越保武・佐藤忠良等の著名な作家を含む国内外の具象抽象彫刻 14 作品が設置された。1980 年代後半からパブリック・アートの潮流に乗り「彫刻のある街づくり」を企画した地方自治体が多く見られる中でも充実した内容と言えるが、惜しむらくは公園課の管理下では十分な保存状態とは言えず、また作品の価値もより良く市民に周知されていないのは残念である。



【←↑写真左上】

リリアとパーク内の彫刻。

平成 7 年には埼玉県主催「彩の国アーティスト・イン・レジデンス」事業の第 1 号となるドイツ人作家が川口市内にて作品を制作、平成 8 年には同事業を引継ぐ形で川口市主催により「アート・ステーション」事業が開催され、以後平成 10 年・同 12 年・同 14 年と開催、海外からの招聘作家と地元川口の作家とで約 2 ヶ月間の滞在制作・ワークショップ等を行ない、その作品は現在もリリアに展示されている。「アート・ステーション」事業はその後、川口市美術家協会より選抜の作家が市内中学校の空き教室で公開制作を行なう「アーティスト・イン・スクール」事業に衣替えし、平成 15 年・同 16 年・同 17 年開催された。（平成 18 年度は Between ECO&EGO 2006 との共催にて実施）



こうした行政主導の活動とは別に民間の中からも美術の動きが見られ、平成 6 年には「斉藤記念川口現代美術館」が開館した。マネキンディスプレイ製作の株式会社ローザ 社長 須賀忠治氏の叔母 斉藤規子氏の資産活用を目的に 1970 年以降の日本の現代美術の最前線で活動する若い作家

の作品を積極的に取り上げ紹介し蒐集して行く方針で、小規模ながら未知数の美術家の面白みある作品の展覧会・パフォーマンス公演・レクチャー等を企画展開した。貴重な現代美術作品のコレクションも数多く収蔵されていたが、平成 11 年 3 月、資金提供者からの援助打ち切りにより惜しくも閉館された。同館の意義を引き継ぐ有志が「川口現代美術館スタジオ」としてその後も活動を続したが、平成 13 年 3 月にそれも終了した。



【写真右→】

森村泰昌「Portrait(Futago)」1988  
 斉藤記念川口現代美術館蔵 撮影：大蔵康範



【←写真左】

銀座の画廊を思わせるエスパスマユウ。

【写真右→】

かたや一日の通行者 1 万人という  
 買い物客で終日賑わいを見せる  
 川口銀座商店街の燦ギャラリー。



平成 10 年 3 月県内初の本格的美術画廊「ギャラリー・エスパスマユウ」が市内にオープン、また平成 12 年には川口銀座商店街に「燦ギャラリー」がオープン、小さな展示スペースながら川口最大繁華街のほぼ中心という立地と低廉な使用料とにより、市民の身近な発表の場として賑わうようになり、これを契機に市内には徐々にギャラリースペースを併設した飲食店などが増え始めた。こうした商店街や

**あなたのアート情報をお寄せください**  
 インターネットでも市内と周辺のアート情報を全線発信!

**eぎゃらりー川口**  
<http://www.egk.jp>

お問い合わせはメールで  
 あなたの情報の投稿フォーマットをお送りします  
 eメール・アドレス info@egk.jp

※eメールの使用がむずかしい方は、皆さんにはぎゃらりー川口(設け要領)を郵送、お電話、郵便物、社名、電話番号、Eメール、郵便番号、住所、〒132-0012 川口市東4-6-3 燦ギャラリー601 田代しんたろう (宛)

市民レベルのアートに対する機運が徐々に高まり、平成 14 年には市民有志で地域のアート情報を発信するインターネットサイト「eぎゃらりー川口」がスタートした。KAWAGUCHI ART FACTORYはその参加者のひとつで、昭和 59 年より元鋳物工場の一部をアトリエスペースとして複数の彫刻家に提供、平成 14 年からはギャラリースペースを新設し在所や関連作家の企画展を開催するユニークなアートスペースである。同じく「eぎゃらりー川口」の参加者で平成 14 年に市内の建築設計会社が古い公団アパートの一室を改装した「masui R.D.R」はオープンした。「eぎゃらりー川口」の開設により地域のアート情報はリアルタイムで発信され多くの市民に利用される事となり、より開かれた形での情報交換が可能となった。



【←写真左】

ギャラリー併設店の草分け、「エコ工房ひだまり」の店内。

【↓写真下】「masui.R.D.R」の展示風景。



【←↑写真左上】

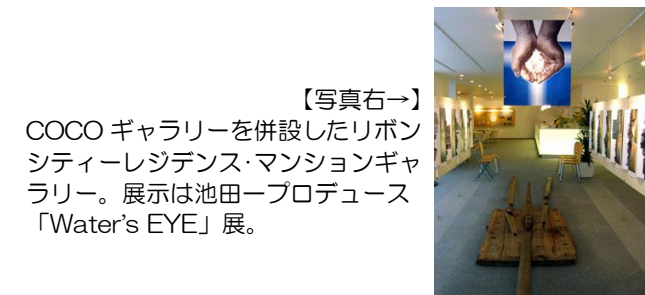
KAFと参加作家たち。

平成 16 年には国際環境アートプロジェクト「Between ECO & EGO –エコとエゴのはざまで–」展が前述の KAF、燦ギャラリーをはじめ旧市街の本一通り、朝日環境センター等、市内各所を会場とし、アーティストや市民が中心の実行委員会主催ながら市長をはじめとする行政も巻き込んで開催され、最先端の現代美術の表現を身近な場所で体験できる貴重な機会となった。同展では解体直前のサッポロビール工場での大規模なインスタレーションも行なわれた。

平成 17 年、解体されたサッポロビール工場跡地に商業施設、住宅施設の建設が進められ、その敷地の一部には「アートパーク」が設けられ 150 坪程の木造平屋(一部 2 階)建ての「川口市立アートギャラリー・アトリア」が建設された。(開館は 18 年 4 月)「アトリア」は市内初の本格的美術専用施設で収蔵品を持たず、展示やワークショップなどを行なうアートスペースである。建物はサッポロビール(株)が建設し市に寄贈、川口市が運営に当たり、これに伴って市では従来、文化担当の行政窓口であった教育委員会社会教育課とは別に市民生活部内に「文化推進室」を新たに設け、アトリアの統括部署とし、市内の文化活動も移管された。尚、このアトリア建設前の場所にはリボンシティレジデンス・マンションギャラリーが仮設され、その中に COCO クラブ川口が運営する「COCO ギャラリー」が設けられ、各種ワークショップと共に写真・絵画・インスタレーション等の企画展示が 8 回行われた。



【←写真左】  
アトリアの建設風景。木造(集成材)でその床はサッポロビール工場の基礎松杭を製材し使われている。



【写真右→】  
COCO ギャラリーを併設したリボンシティレジデンス・マンションギャラリー。展示は池田一プロデュース「Water's EYE」展。



総合的に見て川口は、かつては江戸、そして東京という大都市に隣接した街の、ある種の宿命というべき側面があり、何事においても依存した傾向が見られ、文化芸術においても独自のものを醸成する事の困難さがあると言える。大都市の膝元で物品を供給する生産者という立場は従属的であり、過酷で劣悪な条件下での労働者＝職人には文化への志向は薄かった。また明治以降の鋳物業がより高い収益性や効率性を求めて産業用の量産品に特化した事も文化意識の醸成を生み難かった要因とも考えられる。また、中小規模の工場が主であり、常に景気の動向に敏感に左右され、経営的な安定を得られ難かったのも、必然的に文化芸術を省みる余地の少ない土壌が培われてしまったと言える。ただ、戦後は高度経済成長を経て豊かさを得つつある中で、産業人の慰みという部分で川口の「文化」は音楽や演劇といった芸能的分野において比較的重用された傾向がある。「美術」への関心は「ものづくり」の伝統を反映して潜在的にあるものの、「工芸」的志向や趣味人の余暇の領域に留まる内容と言える。長らく川口の美術の顔たる「川口市美術家協会」も裾野は広いが、美術を生業とするプロの作家は殆ど見受けられず、

多くがいわゆる「日曜画家」で構成されている。近年は東京のベッドタウン化により多くの人が新たに川口に移り住んで来る様になったが、「埼玉都民」という言葉に象徴されるように、相変わらず東京ばかりを眺めて地元を省みない傾向は変わらない。が産業都市から住宅都市に変貌していく中で行政や商業者は地元独自の文化の構築に多くの関心を寄せており、また美術の傾向として従来の美術館やギャラリーといった場所から離れて街や市民との連携を模索する試みが為されており、新しい形での街と美術の関係が今後この川口に根付いて行くのか興味深い所である。

## ー リボンシティ レジデンス・アートコンペティションの報告 ー

サッポロビール工場跡地開発の核となる大規模住宅施設、リボンシティ レジデンスは 868 世帯・約 2500 人が暮らす新しい街であり、従来の住宅販売供給にとどまらない生活者や街全体の生成に関わる点に注視して行く必要があった。施設の充実と共に住民のコミュニティ形成支援こそ重要との観点から「COCO クラブ川口」結成に至る。リボンシティ レジデンスの総合プロデューサー、(株)デザインシヨップアーキテクト代表の建築家 染谷正弘氏が奨める大規模住宅施設における「マッチングシステム」を実践すべく、市内で活動される多くの方々を交えたタウンミーティングを経て「COCO クラブ川口」の方向性が具体化して行った。そんな中でサークル活動やイベントのサポート等とは別にコミュニティのシンボルとなるアートの手法を用いた企画を模索する中で、平成 16 年 8 月 29 日第 3 回タウンミーティングにおいて、市内でユニークな活動を展開する「KAWAGUCHI ART FACTORY」代表 金子良治氏に企画検討を求めた。当初は敷地の一部を利用し「アーティスト・イン・レジデンス」を行なって公開制作やワークショップ等を通じ住民とアーティストとの交流を行なうという内容を提案され、下記の問題点を検討した。

- マンション販売の時点で実施する事で話題性は出せるが継続性(毎年開催等)は望めるのか。継続性がない(1 回きり)の場合、川口に若い活力あるアーティストを導引するというコンセプトは薄くなる。
- 空地にプレハブを設置し工房とするという設定だが、住宅の隣接地で鉄・木・石等の切削・加工等で生じる騒音対策を十分に行なえるか。
- プレハブ建築の費用等は企画の予算に含めるか。その場合、施設の設置・維持費に予算が掛かり運営費内で賄えなくなるのではないか。
- 継続性も含めレジデンスの期間をどの程度にするか。1 ヶ月程度では作家が地元に関わる事は期待出来ないので最低でも 3 ヶ月は必要。その間の作家の滞在費用をどこまでサポートするか。(地方のレジデンス事業では期間中の住居・食事の提供を主催者が行なうが住居のみの提供にとどめるか)
- 最小限の規模で考えても作家数を 2~3 名としないと、ワークショッププログラムや公開制作等に対応しきれないのではないか。(ここでも予算の確保に関係)
- 制作に関わる材料・工具・施設等をどこまで用意できるか。(他の例では、材料は全て支給、概ねの工具・設備も用意され、最も身近に各作家が通常使用している例えばノミ等は持参という形になる)
- 企画の立案から運営・実行・管理等、相当の仕事量が予想されるが、こういった役割分担をすべきか。

以上を検討の結果、敷地内は既にすべて計画済みで余地は無く、また予算規模等からして実行は難しいと考えられ、建築計画の中で実現性のある企画を再検討した結果、敷地内或いは建物内に作品を設置する為の作品選考会(コンペティション)を実施する、公募に当たっては川口在住に限定せず、且つ若いアーティストを対象とする、等の内容で平成 16 年 9 月末頃には方針を決定した。公募の規定は、国内の彫刻展では有数の山口県宇部市の「現代日本彫刻展」の公募規定を参考に、また K A F 内アーティ



ストが過去に参加した公募展の資料や意見も取り入れて作成した。また、同時に作品の選考をお願いする選考委員の方々を検討した結果、前川口市長 永瀬洋治氏、文化女子大学教授 堀尾真紀子氏、埼玉県立近代美術館学芸主幹 中村誠氏、Between ECO&EGO 実行委員会代表・美術家 丸山芳子氏、リボンシティレジデンス総合監修・建築家 染谷正弘氏に委嘱する事となった。

その後、具体的に作品をどこに設置するかを建築事業主側のコスモスイニシア（旧 リクルートコスモス）担当者、設計担当者と検討を行い、当初は小さな作品を敷地内に散りばめるように配置するか、巨大な作品を一つだけどっしりと置くか、または時計や照明・ストリートファニチャー・遊具を兼ねたようなものにするか、などの意見が出されたが、取り敢えず屋内と屋外で、絵画（平面）と彫刻（立体）を計5点選ぶ内容を想定した。が、選考委員をお願いした埼玉県立近代美術館学芸主幹 中村誠氏にご意見を伺った所、内容的に見て単なる公募展の域を出ず新味に欠け、また予算枠も小さく大幅な見直しが必要、との厳しいアドバイスを頂いた。確かに予算案に対して欲張り過ぎた内容と考えられた為、作品設置後のメンテナンスを考慮して設置場所を屋内のみとし、また立体作品を3点選ぶ事とした。平面作品を敢えて除外した理由は、設置場所自体は制約を受けにくいものの、逆にその場の空間性を生かし切れず、またコンペという大きなイベントで選抜されたという存在感を出し難いし、マンション住民が日常的に接する中で立体作品の方が興味をそそり易いのではないか、という意見で一致したものである。予算の制約に関しては、応募の規定を「40歳未満の美術家、アーティスト」とし下限を設けない事で賞典額を押さえ、且つ未評価でも力量のある若手を掬い上げる内容とした。また、選考はマケット（模型作品）で行い、入賞決定後に事業主側と具体的な場所の状況も踏まえて制作設置する事とした。

作品テーマについては当初、

1. 川口市の未来を象徴させる：都市（＝コミュニティ）の「未来」
2. サッポロビール工場跡地の記憶を残す：大地の「記憶」
3. 鋳物を使うこと、あるいは川口の鋳物（伝統）を象徴させる：素材＋技術＝「文化」

をアウトラインとしていたが、「鋳物素材あるいは鋳物を象徴させる」の部分については作品の自由度を妨げる恐れがあるので止め、最終的に公募テーマは、「街の未来」・「町の記憶」に決定、COCO ギャラリー（マンションギャラリー）の使用期限が8月上旬の為、そこから逆算してスケジュール調整を行い、応募申込期限を6月末とし、7月中旬に第一次選考、7月下旬に第二次選考を行う事となった。また、川口市・川口市教育委員会の後援申請も行なって承認を受けた。（※別紙資料参照）

以上の内容で平成17年1月中旬には骨子が確定しチラシの作成、美術雑誌等への広告手配の準備に入った。より多くの参加を望む上からチラシの配布は広範囲に行なう必要があり、特に美術館・画廊・美術系大学等には重点的にチラシの設置をお願いした。また広告による周知は重要と考えられ、「美術手帖」（1948年創刊。美術出版社発行の月刊総合美術専門雑誌。略称BT。世界のアートの最新情報を網羅、わが国でもっとも信頼されている美術総合誌）と、「月刊ギャラリー」（1985年創刊。全国美術館から画廊まで約1000件の展覧会スケジュールを網羅）の二誌にモノクロページながら掲載発注を行なった。（各5月号、4月号に掲載された）（※別紙資料参照）

チラシの配布によって事実上の応募受付を開始、早くも3月末には最初の応募があり、期限の6月末までで20名、そして最終締め切りの7月4日までで計26名の応募があった。7月9日より模型作品の搬入を開始し、12日の期限までに21作品がマンションギャラリー2階のモデルルーム脇に運び込まれ（一部重量のある物は1階COCOギャラリー内）、一次審査の対象作品が揃った。（応募中5名は棄権し不参加）（※別紙資料参照）

7月14日(木)午後1:00より、リボンシティレジデンス マンションギャラリー1階にてアートコ

ンペティション第一次審査が始まった。5名の選考委員に加え、施主側コスモスイニシア（旧 リクルートコスモス）及び設計担当者数名も交えて進められた。審査は、独創性・テーマ性・川口及びサッポロビール工場跡地との関係性・安全性・耐久性 等を基準とし、各作家から提出された資料と、また実物制作された際の問題点などを想定して行なわれた。各員が10点を選んで投票を行い、先ず無得点だったものから選外とし、逆に高得点のものから順次入選させ、下位で同得点及び少得点の物につき全員で協議を行なって、最終的に10作品を選抜した。（※一次選考の様子は別紙資料参照）

各々の作家には、共通質問事項（実物大制作時の具体的な寸法、重量。設置台の有無。メンテナンスの必要性・方法。安全に設置されて倒壊等の危険がないか。）と、選考の中で各委員から出された作品に対する疑問点を個別に伝えて、第二次選考として行なうプレゼンテーションの際に回答してもらう事とした。同時にCOCOギャラリーにて一次選考通過の10作品を展示する事とし、紹介パネルに載せるメッセージも求めた。（川口という街やサッポロビール工場について持つ印象や感想。自分にとっての美術・アートとは何か、どういう存在か。）（※別紙資料参照）

7月28日(木)、リボンシティレジデンス マンションギャラリーに10名の対象者は前半と後半に分けて時間をずらし集合、各対象者にはプレゼンテーションを行なう前にリボンシティレジデンスの販売用ムービー及び建築模型を見学してもらい、本開発の内容を改めて理解して頂いた。13:00より前半のプレゼンテーションを開始。緊張気味の発表者に対して各選考委員からは主に実物制作された時点を想定した具体的な質問が行なわれた。14:00過ぎ、前半に続き後半組開始、そして予定の15:00を過ぎて全員のプレゼンテーションを終了、コスモスイニシア（旧 リクルートコスモス）担当者及び設計担当者も交えて受賞3作品の最終選考に入った。設置場所のイメージを踏まえて検討して行く中で、提示されたマケットを改変した形で出来ないかとか、素材や形式の変更等の可能性について数名を改めて審査の場に呼び確認を行なうなど、熱のこもった選考を経て、16:00過ぎ、全参加者を前に、永瀬洋治 選考委員長より受賞者3名が発表され、最優秀賞に「Wedge」の小川浩子氏、優秀賞に「ラブ・ラブ・クッション」の武田省一氏、同じく優秀賞に「Color-light」の木沢和子氏がそれぞれ選ばれた。引き続き表彰式が行なわれ、受賞三者に表彰状と賞金目録が手渡され、永瀬洋治委員長からは、お祝いの言葉と共に力作を寄せられたお礼が述べられ、中村誠委員からは、全体の講評を頂いた。その後、ささやかなパーティーに移り、染谷正弘委員の音頭で乾杯を行い受賞を祝うと同時に、惜しくも選外となった諸氏の努力をねぎらい、また今後の一層の活躍を応援した。（※プレゼン二次選考、表彰式、パーティーの様子は別紙資料参照）COCOギャラリーでの展示は最終的にマンションギャラリー解体の8月下旬頃まで行なわれ、販売センターへの来場者はもとより、多くの一般市民の方々にもご覧頂いた。

約半年を経た平成18年2月、住宅棟建設は順調に進み、先ずリボンシティレジデンス イーストアリーナ（B棟）が竣工を迎える事となり、最優秀賞となった小川浩子氏の実物作品が2月17日にエントランスホールに設置された。選考時の模型作品にも力強さを感じたが、やはり実際のサイズとなった作品を目の当たりにするととても存在感があり、楠木の独特の香りも雰囲気醸し出していた。その後、内覧会が実施され実際に住まわれる住民の方々にも作品をご覧頂いた。（※別紙資料参照）

続いて7月にはウェストアリーナ（A棟）及びクラブハウス（共用棟）が竣工を向かえ、優秀賞 武田省一氏の作品が7月20日ウェストアリーナ エントランスホールに、同じく優秀賞 木沢和子氏の作品が7月26日クラブハウス（アクアカフェ）内に設置された。武田氏の作品は小川氏の作品同様、選考時の模型作品に力強さを感じたが、実際のサイズの作品は大変な存在感があり（現実に数百キロの重量がある）寄木の独特の風合いが良く、思わず手で触れたくなる温かみのある作品。他方、木沢氏の作品は対照的にクリスタルな光を映すもので、施主側が特別に用意した薄い塗装鋼板製の展示台の上に

軽やかに載り、光が溢れる明るいクラブハウスにはぴったりの作品となった。（※別紙資料参照）

## － おわりに －

受賞3作品は無事に設置を終え、新住民の入居も順次行なわれて平成18年11月23日にはリボンシティレジデンスとしての総街開きが催された。住宅の器がすべて完成し新しい街の暮らしがいよいよ始まった訳である。主役は住民でありここから新しい未来の川口が紡ぎ出されて行く事になる。川口の成り立ちやサッポロビール工場の過去を振り返りながら、新たな未来に向けて記念碑となる事を願い実施された「リボンシティレジデンス・アートコンペティション」の作品達が、この街の人々にどの様に受け入れられて行くのか、それは分からない。が、それが単なる「金のかかった置物」で終わってしまわない為には、それぞれの作品に若きアーティストが込めた思いや願いを、これから形成されて行くであろう地域のコミュニティの中で、伝え残して行く必要がある。出来る事ならばアーティストと住民との接点の場を設け、生の声を届けられる機会が与えられる事が、このコンペティションの意義を生かして行く事につながる。また旧サッポロビール工場敷地内に本開発で新たに開設された川口初の美術専用施設「アトリア」との連携もコミュニケーションツールとしてのアートの活用という点で絶好の機会と捉えるべきである。最優秀賞の小川浩子氏の言葉＝過去・現在・未来が楔で強くしっかりと結ばれる、ように願い、新しい川口を提案した「リボンシティレジデンス」が未来に向けて輝いて、それぞれの作品が川口市民の誇りとしていつまでも大切にされる事を願ってやまない。

平成18年12月

文責：金子良治（KAWAGUCHI ART FACTORY）

### 【参考資料】

川口市史 近代資料編1/現代資料編・川口市史縮小版・川口の歩み・川口大百科事典・サッポロビール120年史

### 《リボンシティレジデンス・アートコンペティション》

【主催】COCOクラブ川口（代表 山田たみこ）

【協賛】東武鉄道株式会社・株式会社コスモスイニシア（旧 株式会社リクルートコスモス）

【後援】川口市・川口市教育委員会

【選考】永瀬洋治（前 川口市長）・堀尾 真紀子（文化女子大学教授・美術家）・中村 誠（埼玉県立近代美術館 学芸主幹）・丸山芳子（美術家・Between ECO & EGO 実行委員会 代表）

染谷 正弘（建築家・リボンシティレジデンス 総合監修）

【最優秀賞】小川浩子 【優秀賞】武田省一 【優秀賞】木沢和子

【企画協力】KAWAGUCHI ART FACTORY（代表 金子良治）

### 《 公募概要 》

■テーマ：街の記憶・街の未来

■応募資格：40歳未満の美術家・アーティスト

■作品規定：屋内設置を想定した立体作品。W41×D41×H58cm以内。

（実物制作時はW1,25×D1,25×H1,75cm以内）素材は自由。

■賞典：最優秀賞 1作品100万円 優秀賞 2作品各50万円

